

令和七年 第五十六回相模薪能 演目

一、半能「井筒」いづつ 観世流 中森貫太 他

巡礼の為に諸国を巡っている僧は、南都から初瀬へ向かう途中、大和国石上にある在原寺に立ち寄った。ありわらのなりひらそこで水を汲み、塚に花を供える1人の女と出会い、在原業平のことを尋ねると「ここは業平の塚であり吊っている」と答えた。さらに直向きな愛情で繋ぎとめた妻である紀有常のことや、歌を交えて幼い頃からの2人の馴れ初めを語った。そして、「私こそが井筒の女と呼ばれた有常の娘だ」と言い残し、井筒の陰に隠れて立ち去った。その後、僧は里人から業平夫婦のこと、高安の女へ通う業平のこと、「風吹けば」の歌を詠む娘の逸話を聞く。その夜、就寝した僧の夢に有常の娘が現れ、業平の形見の衣を身に着け、序ノ舞を舞い井筒の水へ自らを映し、業平を懐かしむ。そして夜が明け、僧は目を覚ますのであった。

一、狂言「宗八」そうはち 和泉流 野村萬斎 他

ある家の主人が出家と料理人の求人看板を出したところ、元料理人で最近、僧になった者と元僧で料理人の宗八が看板を見て訪れて2人とも採用されることになった。早速、僧の仕事と料理人の仕事を任されるが、慣れていない仕事に戸惑う。2人は個々が得意なことでお互いの仕事を補って乗り切ろうとしたが、主人が現場に来てしまい、窮地に追い込まれてしまう。

一、能「融」とわる 観世流 観世喜正 他

東国から訪れた僧が六条河原院で休んでいると、桶を担いだ老人が現れた。僧は、このような所に水汲みがいるはずはない、と疑い老人に尋ねた。老人は、「ここは昔の左大臣、みなもとのとわる源融が陸奥の塩竈の海辺を似せて作らせ、酒宴の遊舞を催した場所であって、水汲みがいても不思議ではない」と答えた。そして老人は、河原院の由来や融のこと、河原院から見渡せる周囲の名所を詳説し、桶に水を汲もうとした時、忽然と夕曇に紛れて姿を消してしまった。夜が更け、僧が河原院で就寝していると月光を浴びた融の大臣が華やかな貴族の姿で現れ、昔の宴を偲び様々な舞を遊舞し、月の光と共に消え去ってしまうのである。